

職業レディネス・テストから始まった就職活動 ～VRTを二度実施して、就職に結びつけた事例～

ハローワーク、定時制高校 就職支援相談員 栗田 稔
(2級キャリア・コンサルティング技能士)

1 定時制高校における「職業レディネス・テスト」の位置づけ

アセスメント・ツール（心理検査）の最大の課題は、結果をどのように活かすかです。残念ながらほとんどの場合、検査を実施した後のフォローがなく、結果を活かしていないのが現状だと思われま

す。私が担当している定時制高校（定時制は4年制）でも以前は2年生時に「職業適性検査」を行っていたのですが、その後のフォローが全くなく、ただの行事になっていました。そこで私が担当するようになった2年前から、「職業レディネス・テスト」（VRT）を3年生時に一度実施をした後、4年生の就職活動時期にもう一度実施（約6カ月後）をするようにして、ただの行事から、進路に結びつけるツールとして活用するようになりました。

全日制の生徒と違い、定時制の生徒の中には特殊な事情を抱えた者が多く、自分を表現しなかったり、将来を悲観してなげやりになっている生徒が多く、そのために、3年時の一回目の検査では、全体数値が低く、特徴が表れないケースが多くみられます。しかし、その後キャリア・コンサルタントから就職支援を受けることで、就職に対する意識や、職業理解が高まり、二度目の実施では、自分の特性を表すようになりま

す。今回は、家庭の事情もあってか全体の数値が低く、分化^{*}していなかった

女子生徒Aさんの就職活動事例を紹介します。

2 一回目の実施

3年生の初回面談時に、卒業後の進路希望を生徒全員に確認しますが、約半数の生徒は全く未定のため、とりあえず仕事や進学に興味を持ってもらうきっかけ作りをするのにVRTを実施します。

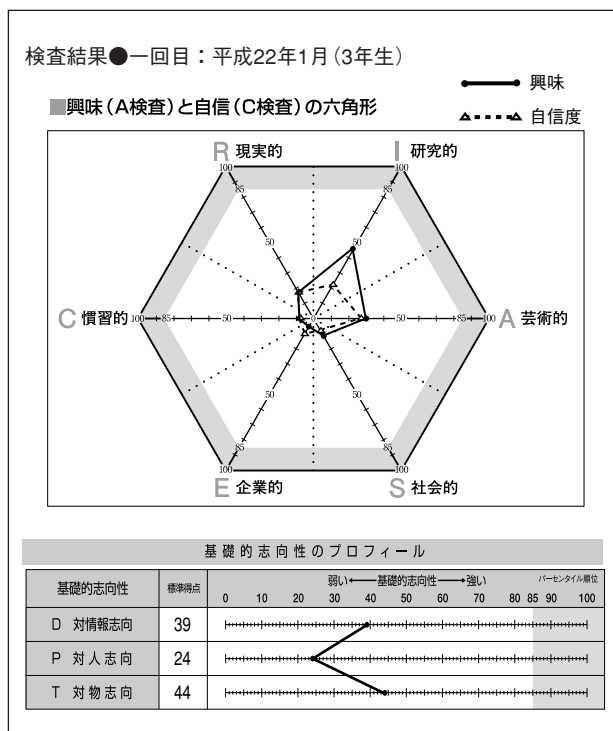
Aさんは、進路相談には全く興味がなく、面談時もほとんど話をしてもらえませんでした。しかし、VRTは受けてみるということで1月に実施をしました。結果はA検査（職業興味の傾向）、C検査（職業に対する自信の傾向）ともに数値が低く、分化していない結果となりました。ただ、両検査ともにAの芸術的領域にだけは○印をつ

けていたので、家でのことや興味をもっていること、趣味などを聞いてみると、家でキーボードを弾いている時が一番楽しく、また授業中は漫画を読んでいると話してくれました。これが後に就職をする時の決め手になります。

一回目に数値が低く分化しない結果が出るのは、キャリア・コンサルタントや担当教師に対して、心を開いていないのも一つの大きな原因と考えられます。そのため、4年生の就職活動時期までに生徒との信頼関係を築いていくのも、コンサルタントや担当教師の重要な役割だと考えられます。

3 二回目の実施と就職活動

一回目の実施以降、面談時にさまざまな業界や職種内容、働き方などを具体的にわかりやすく説明をして、Aさ



んが興味をもちそうな業界や職種と一緒に探していきます。やがて、少しずつ私に対して心を開くようになり、プライベートな話や相談も受けるようになりまし

* 分化：プロフィールの山と谷がはっきりしていることは、興味や志向性が分化していることを意味し、それだけ職業への準備性ができていると解釈される。

求人をもとに、給与や休日、福利厚生など細かい説明することで、Aさんは、業界や職種によって就労条件が違っても理解していききました。

高校の場合は7月に新卒の求人が出ますので、この時期に二回目の検査を実施します。一回目の実施から半年経っただけですが、この時期の高校生は精神的・人間的にもこちらが驚くほど成長していきます。一回目では進路が決まっていなかった生徒もほとんどが就職か進学かの進路を決め、適性検査も積極的に受けるようになります。Aさんも二回目では全体的に数値が上がリ、分化するようになりました。また偶然ですが、B検査の数値は一回目と同じ数値が出ました。

この結果をもとに、数値の高い領域から、まずは興味のある職業を選び、それに近い求人があるかを探していくことにしました。数値の高い（研究的）・A（芸術的）の領域から出版の編集関連やイラストレーター、Rの現実的領域からは製本作業・食品製造、また、Sの社会的領域は数値が低かったのですが、Sの領域からも選ぶことにしました。これはAさん自身が人見知りをする性格で、販売や接客には向いていないという思い込みで低い数値になりましたが、B検査（日常生活での興味の傾向）のP（対人志向）に興味を示し、人の役に立ちたいという気持ちの結果に表れていたため、Aさんが興味を示した介護関連も選んで求人を探してみました。

残念ながら高校生の求人には、A領

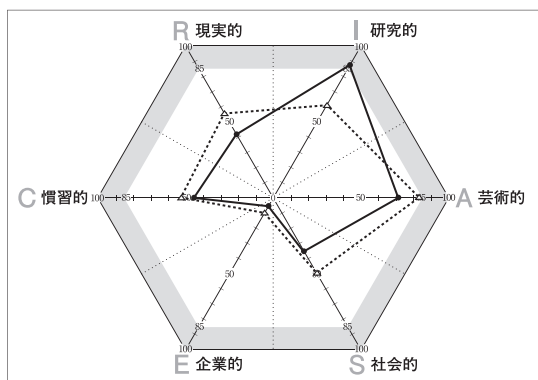
域の職種の求人はなく、それ以外の領域から、就労条件や勤務地などを検討して選びました。高校生の場合は1社ずつしか受けることができないので、受ける順番を1番目「食肉加工の製造」、2番目「出版物の流通管理」、3番目「印刷物の製版・加工」、4番目「老人ホームの介護職員」に決めました。私からの話や説明だけでは仕事内容を具体的にイメージできないため、積極的に会社訪問や説明会に参加して、働き方や仕事の内容をAさんなりにイメージしていききました。

全日制への求人では受けるので、残念ながら3番目までの会社は倍率が20、30倍という高倍率のため、アルバイトをしながら通学をして、欠席も多い定時制の生徒には不利で、不採用となつてしまいました。ただ、Aさんは会社訪問や会社説明会に参加した中で、4番目に順位づけをしていた「老人ホームの介護職」を一番やりたい職業だと思ったそうです。なぜなら、施設での仕事は入居者の介護をするだけではなく、レクリエーションの時間もあり、そこではピアノを弾いて歌を一緒に歌ったり、絵本を読んだり、Aさんの好きなことが仕事の一部としてあることが分かったからです。3番目までの会社では介護施設の職員になりたいという思いがあつて、面接時に仕事への意欲をアピールできなかったということでした。

希望した施設の介護職員の求人は、大手の介護会社のため、一次面接は渋谷の大会場で行われ、当日は就職がま

検査結果●二回目：平成22年7月（4年生）

■興味（A検査）と自信（C検査）の六角形



基礎的志向性のプロフィール

基礎的志向性	標準得点	弱い←基礎的志向性→強い	パーセンタイル順位
D 対情報志向	39		
P 対人志向	24		
T 対物志向	44		

基礎的志向性の下位尺度のプロフィール

P 対人志向	項目	得点	下位尺度	説明
P 対人志向	P1 自分を表現する	5	1 2 3 4 5 6 7 8	人前でちゃんと意見を述べ、自己表現を行いたいという気持ちが強いことを示す。
	P2 みんなと行動する	3	1 2 3 4 5 6 7 8	一人で過ごすよりたくさんの人と一緒に行動したいという気持ちが強いことを示す。
	P3 人の役に立つ	4	1 2 3 4 5 6 7 8	人の気持ちに敏感で、他人の援助をしたいという気持ちが強いことを示す。

だ決まらない大学生も多数参加しており、Aさんはまず不合格だと思い込み、終了後大変落ち込んでいました。しかし、介護施設の職員になりたいという素直な気持ちが面接官に通じたのでし

ょう。一次面接は通り、二次のWE Bテストを学校で受けることになりました。大手の会社では、高校生までWE Bテストを受けるのかとショックを受けましたが、内容は適性検査が中心だということなので、素直な気持ちで受けるようアドバイスをした結果、見事に採用となりました。

職業レディネス・テストの数値では5番目のS領域の職業でしたが、仕事の内容では1番目のA領域の職業に関連する音楽や本の朗読など、本人の好きなことをS領域の職業でも活かすことができ、また、人の役にも立てる職

種に就けたことで、Aさんも親も納得ができた就職だったようです。

4 まとめ

Aさんのように、高校生が受ける職業レディネス・テストでは、全体の数値が低く分化しないケースが多くみられますが、この結果だけで就職や進学に興味や意欲がみられないと判断してはいけないことがわかります。

まだ若く多感な年齢のため、その時の家庭生活・学校生活や本人の精神状態によって数値は大きく変わります。

また、分化した後のフォローも大事で、領域ごとに職業が記載されていても、仕事の内容をみると、比率は違いますがすべての領域の適性が含まれているということを理解したうえで進路指導をすることが大切ではないかと思われます。